開会　令和５年８月２３日
閉会　令和５年８月２３日

足利市総合教育会議

足利市教育委員会

令和５年度第１回　足利市総合教育会議 会議録

１　開催日時　　令和５年８月２３日（水）
　　開会　午後４時００分　閉会　午後５時０３分

２　開催の場所　足利市役所４階　特別会議室

３　出席者
　市　　長　　早川　尚秀
　副 市 長　　塚原　達哉
　教 育 長　　須藤　秀幸
　教育委員　　笠原　健一
　教育委員　　木村　知巳
　教育委員　　松村　由紀
　教育委員　　野口　直美

４　会議出席した事務局職員
　行政経営部長
　地域創生課長
　行政管理課長
　教育次長
　教育総務課長
　生涯学習課長
　学校教育課長
　教育総務課庶務担当総括主幹
　教育総務課庶務担当副主幹

５　傍聴　　傍聴者　　なし

６　会議日程
　○ 市長挨拶
　○ 教育長挨拶
　○ 議題　「産学官連携、包括連携協定を活かした教育について」

７　会議の経過
　○ 開会

○ 早川市長挨拶

第１回の総合教育会議への参会、また、本市の教育行政全般への指導尽力に感謝申し上げる。

この総合教育会議は、市長部局と教育委員会が相互の連携を図り、より一層民意を反映した教育行政を推進していくため、これまでに 16 回開催した。本日も十分に意思疎通を図り、方向性を共有したいと考える。

本日のテーマは、民間活力、産学官連携や包括連携協定などを活かした教育について。

経済社会環境が変化の度を増す中、地域に愛着や誇りを持ち、地域課題の解決に自ら関わろうとする若者たちなくして、本市の持続的な発展を目指すことはできないということである。

次世代を担う人材の育成には、学力向上の取り組みに加え、主体性を育み、可能性を広げ、学びの環境を整備していくほか、民間のノウハウを取り入れた学びの提供というものが大変重要と考える。

本日は、これに限らず、社会教育、文化芸術、スポーツなど、教育の幅広い分野において、民間の力の活用という切り口から、教育委員ならではの視点で意見や提案をいただきたい。

○ 須藤教育長挨拶

早川市長には、このような場を設けていただき、また、塚原副市長にも参加を賜り感謝申し上げる。

本日は、自由な意見交換と幅広い話し合いを通して、課題を共有し、さらにはその解決の方向性を見出したい。

現在、市長のもとで教育ＤＸをはじめとした産学官連携を推進するとともに、多くの民間企業等との間で包括連携協定が締結されている。災害発生の際はもちろん、民間の活力やその優れた点を取り入れようとする動きが活発化している。

学校教育や社会教育においても、民間の力を借りて、専門的な知見により、学習者の学びを広げ深めることにつなげることができるなど、多くの可能性を秘めている。

現在も、公民館での成人学級や高齢者学級、中学生のマイチャレンジ事業など、様々な民間活力によって事業が展開されているが、本日は、学校教育や社会教育の視点において、民間の力をどのように教育に取り入れることができるかなど、様々な角度から意見交換をしたい。

○ 議題　「産学官連携、包括連携協定を活かした教育について」

教育総務課長

産学官連携、包括連携協定を活かした教育について資料説明

市長

学校教育の現場では、民間の方々がノウハウや知見を活用して、金融や防災、租税教育など、これまでにない学びを提供していただいている。外部の方々の話は、子供たちにとって大変新鮮なものである。無償で講師を派遣くださる企業などには大変感謝している。このように、民間の力を活かして、どのような取り組みをしていったらよいか、どのような取り組みができるかということも含め、意見をいただきたい。

笠原教育委員

まず、市と民間活力との連携の中で、子供たちの学びの機会が大変増えていることに感謝申し上げる。本来教育は、学校、地域、家庭でなされているものであるが、専門性の求められることなど、将来子供たちが社会人になっていく上で必要なすべてを賄うことができるわけではない。子供たちにとって教育のバリエーションが増えることは、とても素晴らしい。

一方で、それを当たり前だと、子供たちには思ってもらいたくない。社会や企業の様々な人が関わり、自分たちの健全育成を支援してくれていることに、子供たち自身が気付き、感謝の気持ちを持ってもらいたい。機会に恵まれることが当然ではないことを思ってもらいたい。そういう意味では、一つの情操教育かもしれないが、環境に感謝できるような子供たちに育ってもらえるとなおよいと感じている。

木村教育委員

現在、公益財団法人日本サッカー協会との連携で、子供の夢づくり事業が実施されているが、スポーツ選手、起業家、歌手など、なりたい夢を持つことは非常に重要である。夢を設定した中で、小、中、高とそれぞれの場面で自分がどのように生きるのか考えることが子供にとって非常に重要と感じており、例えば、足利の有名な方を招いた教室ができないものか。市の内外で活躍する著名な方々は、子供たちにとっても身近な存在で、そうした方々と接し、生の声を聴くことは、夢を抱くきっかけになるのではないか。そうした機会が増えることを期待している。

また、ＤＸを推進していることから、手段の一つとしてリモートを活用することも考えられる。サテライトで視聴することができれば、参加の機会ももっと増えるのではないか。

松村教育委員

教育ＤＸ、部活動など、様々な分野における市の取り組みに感謝申し上げる。産業や経済の構造的な変化、雇用の多様化や流動化など、社会は激変しており、子供たちは、先の見通しが持ちづらい。大人でさえ持てていない。子供たちが

将来を考える際に役立つような教育が必要である。一方で、そうした分野は学校の教員も指導が難しいと感じる部分であり、学校としては専門的な方々の助力を大いに期待している。

不登校の子供たち、人間関係を上手く築くことができない、意思決定がしにくい、将来に希望を持ちにくいといった子供が増加していると聞く。

共生社会を生き抜いていくためには、子供たちが変化に対応していく力や態度を育む環境を作っていく必要があることから、学校の先生以外の多様な方々に学校に入ってもらうことも大事である。

有名な方でなくとも、キャリア教育として身近な方々と様々な交流ができるとよい。地域の中の交流において、職業人としての大人の姿を見せることにより、子供たちが自分自身の将来に結び付けて考えることができるようになってほしい。現在、職場見学、体験実習、出前授業など取り組みがなされているが、これはキャリア教育を進めることに自ずとつながっていると感じている。

野口教育委員

マイチャレンジ事業では、参加する生徒と、受け入れ企業との間にミスマッチが生じていると感じている。受け入れ先にとっては、少なからず業務外の負担が増える。一方で、生徒側は実際に担う仕事に満足感が得られない場合もあると聞く。せっかくの機会であるため、生きた教育、社会勉強ができたほうがよいと感じている。例えば、受け入れる職場において、一日の業務の流れ、仕事の内容や目的、あるいはやりがい、直面する課題や問題とその対応などについて、事前に子供たちに伝える工夫ができないか。例えば、動画を作成することで、子供たちが事前学習して、当日に臨むことができる。生きた教育につなげる上で大変重要と考える。

教育長

子供たちには、好奇心と探究心を持ってもらいたいと強く思っている。各学校では様々な取り組みをしているところであるが、学校教育の中でどこまでできるか難しいところがある。

変化のスピードが加速する社会にあって、これからの時代を子供たちは生き抜いていかなければならない。

例えば、デジタル社会に潜む危険など、知識等は学校でも指導できるが、自分たちの生活にどのように生かしていくのかという部分については、社会の変化により敏感である民間の方々の話を聞くことや疑似体験を積み重ねていくことは、大変大きな効果をもたらすものと思う。

子供たちの視野を広げ、そして好奇心や探究心を育むためにも、民間の力は改めて重要であると考えており、各学校に対しても、できうる範囲で教育課程の中に位置づけられるように、教育委員会として考えていきたい。

副市長

各企業が非常に前向きに協力いただいており大変ありがたい。仕事のプロの方々から直接話を聞くことのできる機会は、子供たちに大きな感動を与えるものと思う。これがきっかけとなり、自分の将来を思い描くことにつながるという意味では、学校教育分野の中にこうした機会をさらに増やしてほしいと思う。

もう一点、子供たちはゲームやバーチャルの世界が好きであるが、手を動かして何かを作るという機会は減っているように思う。一方で、ものづくりの原点は、自分の手を使って工作をすることだと思うため、例えば、専門技術を持つ方に実際の技術を見せてもらい、ものづくりの面で学びの機会をつくることもよいのではないか。

また、資料に、上智大学や、中村元記念館との連携の記載があるが、これは足利学校がきっかけとなるものである。かつてイエズス会のフランシスコザビエルが世界に紹介した足利学校と、このイエズス会が建てた大学ということで連携に結びついた。また、中村元記念館とは、庠主という縁で結びついたものである。市民の誇りである足利学校を接点として、国内外への交流や連携を広げていくことも、世界遺産登録への取り組みに合わせて進めてまいりたい。

市長

これまでの取り組みを踏まえて、求める学びのテーマや、企業、団体などについて聞きたい。失敗談をテーマにするテレビ番組もあるなど、人生における成功例や失敗例の話というのは人々の興味関心をひく。民間の方から子供たちに向けて話をしてほしい分野、あるいはテーマがあれば聞きたい。

松村教育委員

子供自身が自分を活かせると思えるような子供の居場所づくりを企業とともに考えていただきたい。

笠原教育委員

以前、比叡山の高僧が来足した際の講話で、満員電車で席を譲る話があった。善い行いをしたことよりも、そうした機会にめぐりあうことに感謝するという話だったと記憶しているが、深く感銘を受けた。子供たちの情緒、心を豊かに育むことに関しては、学校でも道徳が教科になるなど、様々に取り組んでいるところだが、例えば本市においては、足利大学もあり、数多くの寺社仏閣を有していることもある。精神的な強さとか、逞しさとか優しさを、何らかの形で知り、学ぶということがあってもいいのではないか。また、先程副市長が言うとおり、ものづくりというのはとても大事なこと。社会がそうしたことから縁遠くなることは本当に困る。

木村教育委員

マイチャレンジ事業は、子供の職業体験の機会として意義深い。我が社も受け入れており、事業のすべての場面を子供たちに見せている。世の中のトレンドや流れ、ものづくりに対するこだわりを子供たちに伝えることは大変重要と考えている。各企業の業務内容のＤＶＤ化という話もあったが、例えば商工会議所や市のホームページで職業体験できる職場が紹介されると、子供の興味関心はさらに高まるのではないか。本市には素晴らしい会社が数多くあるため、そうした企業で子供たちが職業体験できれば、将来の夢にもつながるのではないか。また、本市出身者には、都内をはじめ全国各地で活躍されている方々も多くいる。この事業は、市内に限ることなく、例えば、一クラス全員で東京に行き、企業を訪問して教えてもらうということも、一つの経験ではないかと思う。この他、本市をロケ地とするテレビドラマや映画などの映像作品は、市外の方々とのコミュニケーションを深めることに大変有用である。私自身の郷土愛にもつながっている。もちろん子供たちの郷土愛にもつながっていると感じている。また、これらの取り組みは、本市の観光振興にも結び付くものと思っている。

野口教育委員

本県にバレーボールのプロチームができると聞くが、自分の目標に向かい、どのような生活を送り、どのように努力したのか活きた教訓となるよう、選手が子供たちに自身の経験や体験談を伝える機会ができるとよい。

市長

文化、スポーツに限らず、目標を持ち、自分が熱中できるものを持つことは、生きる上で非常に大事だと思うため、興味、好奇心、関心を持てるような体験や経験の機会を用意することが大切である。将来、人手が不足すると予測される産業分野があるが、そうした分野において人材が不足しないように、職業の素晴らしさや、やりがいなどを見て、関心を持ってもらうことも必要ではないか。昔の教育番組に、働く人をテーマにする番組があったが、子供の頃の経験や体験から、視野が広がっていくこともある。子供たちには、自ら自分自身の選択肢を広げてほしい。そうした意味でも、分野や内容、連携先など教育委員ならではの提案をいただきたい。そして、引き続き民間企業や団体に協力をいただきながら、子供たちに様々な機会を提供できるように努力していきたい。

次に、残りの時間を、本日のサブテーマである教育ＤＸについて意見交換したい。

教育ＤＸは、ＧＩＧＡスクール構想で整備した一人一台のタブレット端末を、さらに活用するべく、子供たちの主体的な学びにつなげたいという思いから、教育分野へのＤＸ導入について検討を重ねてきた。ＣＩＯ補佐官からつながる

ご縁で、株式会社セールスフォースジャパンに足利学校のある本市の教育の背景や目指す姿などを話す機会をいただき、そこからデロイトトーマツコンサルティング合同会社との連携が実現した。大学など高等教育機関を除くと、全国で初めてのケースとして市町村の教育委員会と連携して、教育ＤＸ戦略アドバイザーを派遣いただいている。また、足利大学の学生には、本市の教育ＤＸ推進支援員として業務に携わっていただいている。このように、本市の教育ＤＸは、市と足利大学、エアロエッジ株式会社、デロイトトーマツコンサルティング合同会社の、４者の産学官連携によって進めており、ＡＩドリルの導入のほか、これまでに導入した電子図書館や電子教科書などを有機的に結び付けるなど、教育を提供する側のよりよい指導に結び付けていきたい。また、受け手である子供たちには、自ら学ぼうとする姿勢を身に着けさせたいと考えている。

まだ、始まったばかりのところであるものの、施策としては素晴らしい体制をとることができた。デロイト社からも大きな協力支援をいただいており、全国のモデルとなるような成果を出していきたい。そこで、この教育ＤＸを進めていくにあたり、事業に関して質問や意見があれば、是非この機会にいただきたい。

笠原教育委員

７月定例教育委員会の後、教育研究所の説明を受けながら、今回導入したＡＩドリルを実際に操作したが、改めて教育が随分進化していると感じた。子供たちは大変恵まれているし、本市の飛躍を感じさせるものであった。

一方で、本市の子供たちのスマホ使用時間が平均に比して長いという調査結果が出ているとおり、やはり、子供たちの学力の課題の一つには、生活習慣の乱れ、特に睡眠時間に影響があるといわざるを得ない。眠い目をこすりながら授業を受けていては、理解できるものもできないのではないか。新しい機器やツールが充実しても、寝不足の状態では、学習効果が期待できないのではないか。本市の問題として、子供たちの睡眠時間が足らないということが想定されるのならば、まずは子供たちの生活習慣を正しくしていただきたい。教育ＤＸの取り組みと併せて、車の両輪としてやってほしい。

市長

最近の若者たちはニュースなどの動画を、スマホを使って２倍速で見ているというテレビ番組があった。小さな画面で、動画を２倍速で見ると、脳に大変なストレスがかかるほか、内容は脳を通過するだけで、記憶に残らないということである。例えば、ゲーム依存症や、スマホ依存症など、体にこんな不具合が生じる恐れがあるといったことを、学校で話してはどうか。スマホをはじめ、道具というのは、使いこなすことはあっても、使われてしまうとか、飲み込まれてしまってはいけない。ネット社会のリスクや危険を教えることは必要だが、

何よりも大切なのは、子供たちが自分の身に迫る危険を自ら感じとることができるように教えることだと思う。

笠原教育委員

目の前に面白いものがあれば、そのことに夢中になってしまうのは、子供であればどうにもならない。ただ、当の本人がその時は気が付かず、後になって後悔するようなことになるのは残念である。

木村教育委員

デロイトトーマツコンサルティング合同会社との連携は驚くべきことである。この取り組みの推進により、教育が大きく変わる可能性を感じている。道具の使い方次第で、授業のスタイルも変わってくるのではないか。子供にとって、先生の好き嫌いが、その教科の好き嫌いにつながってしまうということをよく聞くが、例えば、足利市に数学の素晴らしい先生が３人いて、その先生方が話し合い、綿密に作り上げた一つの授業を配信する。サテライトで授業を受ける各学校の各教室では、担任の先生がサポートする。そのような授業の形が実現するならば、先生の負担も軽減し、授業をデータとして残すことで子供たちの予習復習に活用できるほか、不登校の子供たちの学びの機会にもつながる。教育のＤＸにどのように取り組むかが、子供たちの知識の蓄積に大きく影響すると感じている。

市長

教科担任制の課題の一つには、小中学校の授業時間の違いから学校間で先生の融通が利かないなど、その分野の先生の不足があると聞く。ＩＣＴツールの活用によって、教科担任制も進んで、学びの環境の充実につながるかもしれない。教育ＤＸの中で議論、検討し、モデル校を作っていくなどしていくことも大切と思う。

それでは、本日の議題は終了とする。

〇閉会　　午後５時０３分